

平成18年度第1回中国・四国ブロッククラブ育成推進協議会 報告

日時:2006年7月8日土曜日 13時~17時

会場:山口県健康づくりセンター 第1研修室

去る2006年7月8日に山口県健康づくりセンターにて、第1回の中国・四国ブロッククラブ育成推進協議会が開催された。中・四国地区の育成指定クラブの内、25クラブとその育成を支援する9県全てのクラブ育成アドバイザー、そして日本体育協会クラブ育成課員と県体育協会事務担当者、地方企画班員が今回の協議会に参加した。今回の協議会の目的は、「クラブづくりの進め方」と「経営資源の有効活用」ということに対する理解を深めることにあった。以下では、会議の様子について振り返る。

パネルディスカッション

『楽しく考えるクラブづくりの進め方～場所・人・財源・事業・ネットワークのつくり方～』

最初に、参加者の問題意識の啓発と先進クラブの取り組みに対する情報提供を行うために、パネルディスカッションを行った。テーマは、「楽しく考えるためのクラブづくりの進め方」である。クラブづくりの進め方について力点を入れたのは、昨年の育成指定クラブの事業内容と予算の執行状況を勘察し、行き当たりばったりでクラブ育成を進めるのではなく、2年間でクラブを設立するために、どのような取り組みをすべきかについて理解を促し、計画的なクラブ育成を進めてもらうためであった。



パネリストには、地方企画班員であり、NPO法人ゆうスポーツクラブのクラブマネージャーでもある菅岡克則氏と、NPO法人ELF丸亀の理事長である齋藤栄嗣氏が登壇し、コーディネーターとして岡山県クラブ育成アドバイザーの野上幸恵氏が場の舵取りを行った。

齋藤氏は、スポーツ少年団のサッカーチームの進化系であるELF丸亀の設立の経緯や、クラブづくりを進める上で鍵を握る、場所、人材、財源、事業、ネットワークづくりといった視点から実際のクラブの取り組みを紹介した。中でも、スポーツ少年団の理念を理解し、実現しないチームが増加する中で、スポーツと文化の融合をめざし、野外活動やスポーツ以外に関する科学体験などの実施や、子どもたちの活動記録と成長を振り返るための指導評価表の導入など事例が紹介された。また多くのクラブが頭を抱える財源確保については、玉ネギの栽培事業の取り組みや、クラブの人材を活かし、そろばんや書道教室、サイエンスや韓国語教室などの開催といった様々な工夫が紹介された。齋藤氏は、順風満帆でもなく、正直「楽しい」とは言い難いようなクラブづくりであっても、そのクラブにかかわり、活動するのが、まさにクラブの魅力であると明るく語った。そしてクラブづくりを進めるポイントとして、フットワークが軽く、前向きで明るい発想を持つ女性をクラブに巻き込む必要性と、またクラブの魅力であり、自分たちが誇れるクラブのアイデンティティを持ち、運営に携わるものが「遊びの精神」を忘れないということ、そして最後に、地域社会と太い信頼関係で結ばれることと、その地域にとって宝となる人材育成に力を注ぐことを提案した。

次に菅岡氏が、先輩クラブとしてこれからクラブづくりを進める育成指定クラブにメッセージを送った。まずクラブ設立のステップを紹介し、「ステップ1:誰かに聞いてもらう ステップ2:現状把握」、この段階でスポーツクラブの必要性を感じたら、「ステップ3:理解者を見つけて輪を広げる ステップ4:計画

策定と共通理解、合意形成 ステップ5:設立準備委員会の立ち上げ」という流れを理解してほしいと呼びかけた。ただ現実的にステップ1と2がぼんやりとしたままで、育成指定クラブに名乗りを上げている地域が多いことを踏まえ、そのまま前進し、「課題解決と課題解消型のクラブ」に終わらず、「夢が語れるクラブ」へと進化を遂げてほしいという願いを伝えた。というのは、前者のようなクラブ育成だけを進めれば、クラブを運営することが苦痛になり、楽しさが実感できず、組織が息絶えてしまうと指摘し、クラブが1つ上のステージに進むためには、「子どもたちや自分自身の夢、また地域に対する夢が語れる」ということが重要な鍵を握ると指摘した。またクラブマネジメントを進める上で、多くのクラブに欠落する視点が「サイクルになっていないマネジメントサイクル」ということであった。つまり、多くのクラブは、Plan:計画(目標の明確化) Do:実施(計画の実施) Check:評価(実績の評価) Act:改善(プロセスの改善)というマネジメントサイクルにおいて、PlanとDoで終わる自己満足型の事業を行っていることが多いということであった。投入した資金をはじめとする経営資源がクラブの目的や目標に対して効果的であったのかどうかをチェックし、改善するという行為を怠れば、クラブは発展しないということが述べられた。問題視される財源確保についても、クラブの収入源を正しく理解すべきであり、受託事業や補助事業についてのアンテナを張ったり、自動販売機などの物品販売事業に手がけたりするだけでなく、主たる財源となる「会費」について理解を深め、十分検討し、クラブ運営のシミュレーションをすることが重要であるということであった。またクラブづくりを進める上で大切なものとして、安易なNPO化をしない、5年・10年後のクラブのビジョンを持つ、行政に依存する傾向が強い中、クラブと行政は弱みを補完し合うパートナーであることを理解する、そして地域に夢づくりに欠かせない存在になるということを菅岡氏は提案した。最後に、コーディネーターの野上氏は、楽しいことも苦しいことも様々なことが起こるクラブづくりにおいて、多くのクラブが試行錯誤する中で、「運営に携わる人たちが楽しさを実感できるクラブ」、また「将来の夢が語れるクラブ」ということが2つの事例から理解してもらえたのではないかと場を締めくくった。



グループワーク “すぐろくで考える『総合型地域スポーツクラブ』”

続いて、グループワークが行われた。本協議会開催県のクラブ育成アドバイザーの大野氏と昨年度まで育成指定クラブであった宇部市の大上氏の企画・運営による「すぐろくで考える『総合型地域スポーツクラブ』」というワークを行った。これまでディスカッション形式で行うワークが個々のクラブの現状や課題を話し、「すっきりする！」というだけに留まっていたため、クラブが直面する課題や解決に向けた取り組み、アイデアの創出が明確化できなかったことの反省に基づき、すぐろくで楽しくワークを進めながら、クラブが直面する課題と解決方法について洗い出し、それを成文化することによってクラブづくりに必要な事柄に対する理解を深めることがこのワークのねらいであった。ワ





ークは、「すごろくで洗い出そう！クラブの課題」と「すごろくから考えるクラブの課題と解決策」という2つのセッションによって進められ、ワークの振り返りをシートに記入し、その後、グループ内で意見交換を行った。初年度の育成指定クラブは、「課題」が何であるかすら明確でないところが多かったものの、各グループに配置されたクラブ育成アドバイザーのファシリテートによって、これから直面するであろう課題を想定し、解決策についても知恵を絞りながらワークに取り組んでいた。

会議を終えて・・・

クラブ育成支援事業も3年目を迎え、今回の協議会からは、パネルディスカッション、グループワーク、ともに各県のクラブ育成アドバイザーのイニシアティブとリーダーシップのもとで進める方向性に切り替えた。これは、クラブの育成と啓発に携わるクラブ育成アドバイザーがこれまで目にしてきたこと、経験してきたこと、そして感じ取ったことを企画として取り上げ、それを形にして実現するという事業のコンセプトメイキングから計画、実施、評価に至るまでのすべてをクラブ育成アドバイザーの手で実現してほしいという地方企画班員の願いである。もちろん、クラブ育成アドバイザーが日頃、育成指定クラブにとって欠かせない存在であることは認識しているが、現場で対応し、実感することを、事業に反映し、マクロレベルでクラブ育成を支援していくという認識をクラブ育成アドバイザーに持ってほしいためでもある。したがって、端を発した今回の取り組みは、意味あるものになったことと確信している。

またグループワークを観察する中で、今回は育成指定クラブのワークに対する取り組み姿勢が目についた。それは、決していい意味ではない。問題意識や積極性がほとんどみられないクラブがかなりみられた。暗中模索、藁をもつかむような想いがあるのならば、なぜもっと積極的にどん欲にワークに臨まないのか？また1つでも多くの情報を得たり、自分自身が抱える問題を解決したりしようとしなのか？与えられたプログラムに単に参加するだけでなく、その場に身を置く個々人がプログラムにどうかかわり、どう振る舞うべきかを、もっと考えてほしいと思う。なぜならば、地域に戻れば、自分自身がクラブ育成において同じような立場に身を置きながら、地域の人たちと向き合っていかなければならないからである。もちろん、参加した育成指定クラブすべてに当てはまるわけではないが、全国40近くの地域が育成指定クラブになれなかったこと、また選ばれたクラブだけに与えられる税金をクラブ育成に投じるという行為の意味を考え、委託事業を受けているという誇り、そして責任と自覚をもってクラブ育成に今後携わってほしいと切に願うばかりである。

(報告：中国・四国ブロック地方企画班長 長積 仁)